

瀬戸貴司, 千場 博, 西田有紀
深井祐治

非小細胞肺癌634例中, 来院時に胸水を伴い, 細胞組織学的検索で肺癌細胞浸潤が認められた70例(うち, 9例は胸腔穿刺胸水細胞診が陰性例で, 胸腔鏡下生検にて悪性細胞浸潤が認められた症例であった)の子後をレトロスペクティブに検討した。単変量解析では, PS, N因子, 胸水貯留部位, 胸水蛋白定量, 一日胸水排水量, 局所療法の有無, 及び全身抗癌化学療法の有無により予後に差が認められた。

34. 肺癌脳転移症例の子後の検討

熊本市市民病院呼吸器科

今村文哉, 田中不二穂
福田浩一郎, 津守美香
宮川比佐子, 岳中耐夫
杉本峯晴, 志摩 清

肺癌患者における脳転移は日常臨床においてしばしば経験し, 患者の子後を左右する重要な因子であると考えられる。今回, 我々は脳転移をもつ肺癌患者の子後について検討したので報告する。1987年より1995年までに熊本市市民病院呼吸器科に入院した肺癌患者は488例で, 臨床病期IV期は155例。そのうち脳転移を認めたものは40例であった。脳転移例は同時期の臨床病期IV期例の子後に比し, 良好な傾向を示した。脳転移に対しては積極的治療により予後を延長できる可能性がある。

35. 肺癌と凝固系について

佐世保市立総合病院内科

吉塚直人, 荒木 潤, 水兼隆介
夫津木要二, 浅井貞宏

肺癌では, 病期の進行と共に, 凝固線溶系が亢進することが多く, 予後との関連も報告されている。今回我々は, 肺癌の臨床

病期と凝固系との関連について検討した。

対象は1996年度に, 当科に入院した肺癌症例50例である。TAT, D-dimerは遠隔転移症例で高い傾向にあり, 特にTATは有意に亢進していた。DダイマーとTATが腫瘍の進展寛解を経時的に観察するのに有用であるという報告が多く, 今回の結果に合致する。

36. 肺原発の平滑筋肉腫の1例 長崎市立市民病院内科

川畑 茂, 高谷 洋, 須山尚史
神田哲郎
長崎大第1外科 綾部公懿
同 病理部 津田暢夫

症例は69歳男性。主訴は咯血。胸部単純X線上, 右肺縦隔側に急激に成長する異常影が認められるも喀痰細胞診, 内視鏡検査などで確診が得られなかった。他に転移はなく, 治療的診断として右肺上葉切除術が行われ肺原発の平滑筋肉腫と診断された。文献的考察を含め報告した。

37. 肺carcinosarcomaの1例

佐世保市立総合病院外科

城 健二, 中村 譲, 本庄誠司
南 寛行, 窪田美佐雄
石川 啓, 三根義和, 赤間史隆
山住和之, 二宮浩範
同 病理 岩崎啓介

症例は63歳男性。検診にて胸部X線上左肺S₁₀に5.4×3.5cmの腫瘤影を認めた。BFを施行し, 左S₁₀の気管支擦過細胞診にてclass V扁平上皮癌疑いの診断であった。左肺下葉切除, リンパ節郭清術を施行したところ肉眼的には腫瘍は5.4×4.2cm大で白色充実性であった。病理学的には間質部の肉腫様増生を主体とし一部腺癌像を伴いso called carcinosarcomaの診断を得た。この症例に若干の文献的考察を

加え報告する。

38. 肺原発と考えられた悪性黒色腫の1例

済生会八幡総合病院外科

葉 倫建, 石川博人, 岡本正博
野添忠浩, 末廣剛敏, 舟橋 玲
磯 恭典, 北村昌之, 松股 孝
産業医大第1病理 笠井孝彦
久留米大第1外科 白水雄
症例は74歳女性, 薬剤師, 喫煙歴, 既往歴なし。H8年6月より咳が持続する様になる。胸写, CTで右S⁶に異常影を認めた。気管支鏡で右B⁶は灰白色の腫瘤が突出しほとんど閉塞していた。左腋窩に1×2cmのリンパ節を触れた。TBB, リンパ節生検の結果は悪性黒色腫であった。ほかに原発巣と思われる病変はなく, 肺原発悪性黒色腫と考えられた。H8年11月7日右下葉切除術, H9年3月4日左腋窩リンパ節郭清を施行した。

39. 肺原発性悪性黒色腫の1手術例

宮崎医大第2外科 帖佐英一

松崎泰憲, 前田正幸, 清水哲哉
市成秀樹, 富田雅樹, 星野祐二
中村都英, 関屋 亮, 塚塚敏男
同 第1病理 浅田祐士郎
県立日南病院外科 柴田紘一郎
極めて稀な肺原発性と思われる悪性黒色腫の1手術例を経験した。症例は64歳, 女性。検診で胸部異常陰影を指摘された。胸写上, 右上肺野に4.0×2.5大の辺縁鮮明, 内部均一な雪達磨状の腫瘤影を認めた。増大傾向を認めたため悪性腫瘍を疑い, 右肺上葉切除術を施行した。病理診断はHMB-45染色陽性の悪性黒色腫であった。術後の全身検索及び血中5-SCDでは異常を認めず, 肺原発性の悪性黒色腫と考えられた。

40. Large cell neuroendocrine